

幼いころの兄との思い出

二年 齋藤 明希（平成四年度）

兄は、卒業式の日、一つぶも涙をながさなかった。今まで十五年間くらしてきた鳥を離れるその日も、いつもと変わらず、玄関の戸口で「じゃあいぐがら、バイバイ」とわたしに言っ
て出ていった。港まで見送りにも行きたかつたし、「がんばれよ。」と、声もかけてやりたかつた。でも何も言えなかつた。涙がこみあげてきそうだったから。父も母も兄のことは見送りに行かなかつた。わたしと同じ気持ちだったのだろう。船が発して、一時間ぐらいたつた。父もわたしもだまつていたが、さびしさをかくせなかつた。すると買物に行った母が泣きながら帰ってきた。「店のおばさんから、『たちちゃん、とうとう行ってしまったね。』」つて言わつたら急にさみしくなつてしまつて」と父に言いながらずつと泣いていた。わたしは、見ていられず、自分の部屋に行った。「この海のむこうにお兄ちゃんが住んでいるのか。」としばらく海を見ていた。夕食のあと、母は台所で一人で泣いていた。

その日の夜、小さいころの兄との思い出が浮かんできた。兄は保育園の年長組で、わたしはまた、保育園に入る前のことである。

わたしの家は旅館をしているので、夏は観光客が多くて、

すごくいそがしい。父や母にもかまつてもらえず、いつも兄といっしょに遊んでいた。ある日二人で、海にビーチサンダルをはいて遊びに行った。かにをつかまえたり、やどかりをつかまえたり。わたしは、はいていたビーチサンダルをぬいで海に入った。

夕方になつて、兄が「そろそろ帰ろ。」と言つた。わたしは、「うん」といつて、サンダルをはこうとしたが、サンダルがなかつた。わたしが「お兄ちゃん、サンダルないよ。」と泣きながら言つたら、兄は「お兄ちゃんも探してやるから、泣くな」といつて、いっしょに探してくれた。一生懸命に探したけど、サンダルは見つからなかつた。「最初に山のグラウンドに遊びにいったからそこにあるかもしれない。行くぞ、あき。」と言つて、泣いているわたしの手をひいて、グラウンドに行った。グラウンドに行くまでは、山道を通らなければならぬ。木がたくさんたっている、うす暗い道を幼い子供が二人で歩くのは、とても危険なことだ。わたしは、とても怖かつたけど、兄がいたから頑張れた。でも兄は、きつとわたし以上に怖かつたと思う。だれにも頼らないで、まだはつきりわからない山道を、泣いている妹の手を引いて、自分だけを頼りにして歩いたのだから。兄は「強いなあ」と思つた。山道は、石ころがいっぱいあつて、はだしのわたしは、足がいたくてたまらなかつた。兄は、わたしが痛がつているのに気づき、「ほら、お兄ちゃんのサンダルはいていいぞ。」と

言って、自分ははだしになつて、わたしに、自分のはいいたサンダルをはかせてくれた。兄は痛いのを我慢して何食わぬ顔で歩いた。結局、ビーチサンダルは見つからなかった。あまりにも帰りが遅いわたしたちを心配して、父が迎えに来てくれた。その日の夜、兄は疲れてぐっすり寝た。

でも、このことは幼い、まだ何もわからないわたしには、ほんのささいなことにすぎなかった。でも月日がたつて、いまこうして考えてみると、兄に、心からありがとうを言いたい気持ちになった。自分を犠牲にして、わたしのことを一番に考えてくれた兄のやさしさ、自分も怖いのに、わたしを怖がらせないようにするためにかけてくれた声、兄の一生懸命さが今なら痛いほどよくわかる。もしわたしと兄が反対の立場だったら、わたしは兄のように行動できるだろうか。その自信はない。たぶんできないと思う。

兄とはもう、離れ離れになつてしまった。幼いころのあの一つの思い出が、わたしの中のさびしさをまた大きくした。兄に会いたくなつた。兄は今ごろなにをしているのだろう。そんなことを考えているうちに、わたしはいつのまにか眠っていた。